

## 「女性歴史文化研究所 開設三〇年に向けて」

第二回「女性歴史文化研究所の役割と意義」未来に向けて」

第三部…女性歴史文化研究所の果たした役割と意義

第四部…これからの女性歴史文化研究所「今後の展開、未来に向けて」

日時…二〇二一年二月一日(水)九時三〇分～十一時三〇分

会場…京都橘大学 響友館F301教室

出席者…※敬称略

田端 泰子(京都橘大学名誉教授／元学長)

元女性歴史文化研究所長(初代)

鎌田 明子(京都橘大学名誉教授)

元女性歴史文化研究所第二プロジェクトリーダー

志賀 亮一(京都橘大学名誉教授)

元女性歴史文化研究所第三プロジェクトリーダー

増淵 徹(京都橘大学文学部教授／女性歴史文化研究所長(第九代))

北川 千差子(京都橘大学学術振興課)

コーディネーター・司会…増淵 徹

女性歴史文化研究所(一九九二年二月開設)が三〇年を迎えるにあたり、研究所のさまざまな活動や、社会における役割や意義について語り合う座談会を開催する。前回、第一回目座談会(二〇二〇年一月二〇日開催)では、「なぜ女性史を主な研究テーマとする研究所を開設したのか」など、開設当時の状況から発展期(おもに一九九二年から二〇〇〇年まで)を振り返った。

第二回目となる今回は、女性歴史文化研究所の果たした役割と意義について総括・評価を行うとともに、今後の新たな展開について考える機会としたい。

現在進行中の「第二三プロジェクト…社会における女性の活動―京都とその周辺を舞台にして」による『京の女性史(続編)』作成に向けた課題、第一四(新)プロジェクトの方向性、女性史研究の現状と課題、現代社会が抱えるジェンダー・女性文化に関する課題とその解決に向けての提言など、さまざまな角度から検討を加えることとしたい。

## 「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

第二回「女性歴史文化研究所の役割と意義―未来に向けて」

【増測】

本日は朝早くからお越しいただきまして、ありがとうございます。女性歴史文化研究所も開設から三〇年という時間が経ちまして、自分たちの歩みを振り返り、次の段階への材料を残していこうということ、座談会を開かせていただきました。

昨年度は女性歴史文化研究所の初代所長である田端先生をはじめ、歴代所長である細川先生や松浦先生と一緒に、どちらかといえば女性史関係の研究がどのように始まり、どのような活動に取り組んでこられたかというお話をお伺いしました。一方で、女性歴史文化研究所の活動は女性史研究だけではなく、実際に社会で生きて、働いている女性が抱えているさまざまな問題に対しても考察する活動が、もう一つの柱として展開されてきました。

今回は、そちらの話を中心に据えて、かつてどのような問題意識から取り組まれたのか、そこからどのような成果を出し、どのような研

究所として、その役割を果たしてきたのかを振り返り、その活動から見いだされる今後の課題についてご指摘いただきたいと思っています。まずは、第二プロジェクト、第三プロジェクトといった研究所開設当時のプロジェクトについて、お話しいただこうと思います。

鎌田先生、第二プロジェクトを立てたのはどのような理由だったのですか。

【鎌田】

女性歴史文化研究所紀要の第一回座談会を読ませていただいて、女歴研がどのような経過で発足したのかを懐かしく思い出しました。

私はまだ大学名に「京都」もついていない「橘女子大学」創設の一年前から事務室で働いていましたので、前回の座談会で述べられた研究所設立の前段階にあたる部分を思い返してみました。

女歴研の創設は一九九二年ですが、その二〇年ほど前に、京都に広く女性の問題を考える「婦人問題研究会」（まだ「女性学」という言葉はなかった）ができて、私はそこに参加していました。その活動が、女歴研創設とその後の三〇年の歴史につながっていると考えていますので、



鎌田 明子(かまだ あきこ)

京都橋大学名誉教授。

立命館大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程。文学修士。

専門：英米文学、ジェンダー学。

研究課題：「D.H. ロレンス研究」「T.モリスン研究」「文学と女性学」

主な業績：『ロレンス研究—恋する女たち—』（共著）（朝日出版社、1979年）、『ロレンス研究—「チャタレー夫人の恋人」—』（共著）（朝日出版社、1998年）、『性と生殖の女性学』（世界思想社、2006年）、『（悪女）の文化誌』（共著）（京都橋大学女性歴史文化研究所叢書、晃洋書房、2005年）、『母と娘の歴史文化学—再生産される性』（共著）（京都橋大学女性歴史文化研究所叢書、白地社、2009年）、『ロレンス書簡集』（I～X巻）（共同翻訳）（松柏社、2005～2022年）など。

少し補足するところから始めます。

なぜ橋女子大ができたのかというお話は前回も出ていましたが、思い返しますと、京都産業大学が一九六五年に設立されるなど大学の新設ラッシュがあり、その最後に本学ができて、京都の四年制女子大学は五つになりました。本学開設当時（一九六七年）、京都女子大学、同志社女子大学、ノートルダム女子大学、光華女子大学があつて、そこに本学が加わったのですが、歴史の古い京都女子大学や同志社女子大学には女性歴史文化研究所のような研究機関はありませんね。本学が

女性歴史文化研究所を作り、以来三〇年間にわたり活発に活動を続けてきた意義は大きいと思います。

新しい女子大学の中身をどう充実させるのかについては、第一回座談会で田端先生がおっしゃったようなさまざまな議論がありました。この開設時につくられたプランが、いまに至る橋の運命を決定したと思います。なぜかと言うと、当時は女子大を新設するにしても、従来の良妻賢母型の教育を基本的に踏襲するのか、あるいは新しい理念を打ち出すのか、という問題があつたのです。このとき本学が掲げたのは、新しい教育理念となる女性の自立をめざすもので、これが決定打となつたと思います。

伝統的な女子教育とする可能性もあつたけれども、理事会が高田三郎先生（初代学長）を全面的に信頼して任されたからこそ、「女性の自立」をめざすための構想を練ることができたと思うのです。その結果、名誉教授級の男性の教員と、かたや若い女性の教員という構成になりました。

当時はまだ世間では、女性は男性の補助として見るという考え方が一般的でした。しかし、新たな構想による大学が発足すると、ご高齢の先生方は抵抗なく、新しい女子教育をどんどんやれるような雰囲気があつて、私はそれを不思議だと思いました。私の解釈では、実際に脇田晴子先生（当時、本学歴史学科助教授）をはじめとした若手の女性の先生と一緒に仕事をしてみたら、何ら文句を申し立てることがなかったのだと思います。

女性教員の出産休暇の問題もありましたが、それに対応して仕事の



写真1 婦人問題研究会会誌「婦人問題研究」第1号(1970年6月20日発行)

形態も変えていくという場面に直面したから、柔軟に考え方を変えることができたのだと思います。もともと、当時の男性の先生方は、最初からリベラルな考え方を持っておられたと思います。

高田先生の奥様である峯尾先生は同志社女子大学の教授で、オックスフォード大学留学中に高田先生と出会われたと聞いています。峯尾先生は英文学の研究者として橘にも非常勤講師として来られていたと記憶しています。高田先生は奥様を通じて、女性も男性も対等であるということ、身近に実感されていたのだと思います。それで、あのような構想プランを練ることができ、それによって若い女性もどんどん採用されたということで、そのプランに基づいて女子大が誕生したのはラッキーだったと思います。

会議が長引くと、携帯電話などない時代ですから、脇田先生が学長室から家に「帰りが遅くなる」という電話をされるのですが、「ちよっ

と修おさむを呼んで」と言われることがありました。また、高田先生との会話で「修がね」という言葉がよく出ていたのでしょう。ある時、高田先生が私に、「僕ね、驚いたよ。修さんというのは、ご主人だそうですね。息子さんだとばかり思ってたよ」と(笑)。

女性が働くとはこういうことだという実態が学内にありましたから、「自立した女性の育成」という建学の精神を実証する女子教育をするには、女性がきちんと働ける体制が必要だという、いわば理想形の追求があったのではないかと思います。

一九七〇年頃だったと思いますが、私は脇田先生から「今度、京都で婦人問題研究会を発足させるから参加したら？」と声をかけられました(婦人問題研究会「一九七〇年四月発足。会誌の「婦人問題研究」は橘女子大学で発行されていた)。それで、第一回例会に出席したのですが、メンバーは寿岳章子先生、脇田晴子先生、清水好子先生、西川祐子先生、荒井とみよ先生、寛久美子先生、田端泰子先生など新進気鋭の顔ぶれで、「少々お静かに」と言われてもしゃべる方々が参集したものですから、すごい迫力でした。寿岳先生たちは、京都大学の入学試験を受けられなかった時代の人たちです。国立大学で初めて女子を受け入れたのは現在の東北大学でしたが、そこに進学された人たちは「日本の女性に生まれたから、こんな差別を受けなければならない。教育の場だけでなく、社会にこんな問題がいっぱいある」と問題提起をするだけでなく、自分たちの専門以外の研究者たちと交流して、そういう問題に関心のある一般の人たちも集まって「婦人問題研究会」を立ち上げました。この第一回例会のときの熱気は、いまでもよく覚え



ています。

名古屋から来られた田中美智子さんという方が、「さすが京都という土壌ですね。こういうことができるのだもの」とすごく感激して、「政治の場でも、ちゃんと進めなければいけない」と熱く語られたのが記憶に残っています。確か、のちに国会議員になられたと思います。

私は、この「婦人問題研究会」から始まり、後に女性学からジェンダー学という一連の学問に興味を持って、専門の英米文学との絡みの中でゼミなどを持ち、退職後も一〇年間活動しています。それはやはり、このような橋での教育の場で培われたものとながっているからだと思います。

それにしても、女性歴史文化研究所開設三〇周年シンポジウムを企画するというのはすごいことですね。当時の運営委員も、いろいろなところに問題意識を持って、「いま、どんなシンポジウムをしなければならぬのか」といった具体的な提案をしていました。その過程で私も幅広く勉強できたし、また、衝撃を受けたシンポジウムもありました。

しかし、そのように研究所が三〇年間ずっと検討したり、問題視して研究してきたことが、現実にも少しも解決されたり前進しているかと言え、依然として潜在している状況です。表面的には以前のようないびつな差別は少なくなっているかにも見えても、実際はもつと複雑なかたちで日本社会に深く根を張ってしまったようです。

新型コロナウイルス感染症がはびこるように、社会がガタガタになるような事態が起きたとき、おろそかになっている社会構造の問題点

が暴露されます。たとえば、女性への打撃が顕著である現状がありますが、それを他人事のように受けとめたり、「そのうち変わるだろう」という視点でとらえてはだめで、やはり研究所は、そういう問題をどんどん取り上げて、その原因究明のためのシンポジウムを開催したり、紀要や広報誌に発表する必要があります。すなわち、社会に向かつて窓を開くことが大切で、それも研究所の重大な責務であると思います。専門的な学問の深掘りも絶対に必要ですが、研究所本来の役割を発揮しなければいけないと考えます。

新型コロナウイルスが蔓延する<sup>まんえん</sup>という異常事態に陥ったときに、なぜ自殺する女性が多いのか。日本社会のどこに原因があるのか。ちなみに東海ジェンダー研究所がコロナ以前に出したニューズレター LIBRA (No.60 二〇一七 七月)に、窪田由紀さん(当時、名古屋大学大学院教授が「ジェンダーと自死」というタイトルで、日本における自殺という行為の男女の違いについて書かれています。この問題は社会の重要課題として存在しているのですが、二一世紀のパンデミック状況下に、かなりの数の女性が無理由で自死しているわけで、そこにスポットを当てると何が見えてくるかというようなシンポジウムを開くとか、女性歴史文化研究所で検討すべき問題は山ほどあると思います。

#### 【田端】

本学の設置は一九六五年に決定され、六七(昭和四二)年に認可を受け、「高雅にそして真実に」、「自立した女性の育成」を理念として出



田端 泰子(たばた やすこ)

京都橘大学名誉教授／元学長／元女性歴史文化研究所所長(初代)。

京都大学大学院文学研究科博士課程国史学専攻単位取得後退学。文学博士(京都大学)。  
専門：日本中世史・女性史。

研究課題：「中世後期の村落構造に関する研究」「中世における女性の地位と役割」

主な業績：『日本中世女性史論』(瑞書房、1994年)、『日本中世の社会と女性』(吉川弘文館、1998年)、『乳母の力—歴史を支えた女たち』(吉川弘文館、2005年)、『山内一豊と千代—戦国武士の家族像』(岩波書店、2005年)、『日本中世の村落・女性・社会』(吉川弘文館、2011年)、『足利義政と日野富子 夫婦で担った室町将軍家』(山川出版社、2011年)、『歴史のなかの女性の人權』(世界人權問題研究センター、2012年)、『室町将軍の御台所 日野康子・重子・富子』(吉川弘文館、2018年)、『日野富子 政道の事、輔佐の力を合をこなひ給はん事』(ミネルヴァ書房、2021年)など。

発しました。本学が女子大として開学した背景には、戦後の日本で大  
学は官立が一九、公立が二、私立が二七あった中で、学生数は男子約  
八万人に対して女子はたった二〇六人にすぎず、比率に直すと女子は  
男子の四〇〇分の一にすぎなかった点があげられます。女子に対する  
大学教育の必要性が、戦後日本では急務だったということです。GH  
Qの指導のもとに作成された「女子教育刷新要項」でも「ユニバーシ  
ティは、知的自由の伝統に支えられた学問研究、すぐれた市民形成の  
ための一般教養研究、それに専門職業教育の三つの社会的機能を、で

きるだけ平等に(with equal concern)果たさなければならない」と述べています。

このことから、戦後日本の社会における喫緊の課題は、女性に選挙権を与えて参政権を承認すること、女性に対する高等教育を受ける権利を保障することであったことがわかります。(田端泰子「日本における高等教育の変遷と男女共学の理念」／女性歴史文化研究所紀要第一三号、二〇〇五年より)

私は本学創立三年目から着任しましたが、鎌田先生が言われたように、年齢の高い名誉教授級の先生と若い女性の助教授・講師集団とで教授会が開かれ、創立時は週に一回ぐらい開かれたと聞いていますが、唯物論や仏教哲学などを専門とする話の長い先生が多かったです。本質的なものすごい議論がずっと続いていて、夜中の一時、二時になるのです。もうバスもないし、教授会のある日は泣きたいような状況でした。夫に早く帰ってもらうのですが、それでもなかなかうまくいかないということがあって。若い我々は翌日も授業があるし…。でも、それをずっと続けてこられたというリベラルさが本学の特徴ですね。女性の働き方に関しても、若手の改革進言に対し、納得して付き合ってくれた年配の先生方は偉かったなと思います。他の大学ではみられないような状況でした。初期の卒業生は、あんな偉い先生方に教えてもらって幸せだったと言っています。

#### 【鎌田】

非常に柔軟な考え方を許す雰囲気と学風があったと思います。

【田端】

最初の頃の苦難の時期を越えて、私たちが年齢で上の方になると教授会は月一回か、多くて二回ぐらいになりました。以前は教授会だった日が空くようになったから、その日に女歴研の運営委員会を開いたので、いろんな専門の方が必ず集まってくださったので、研究所を運営していくうえでもすごく大きな力になりました。

運営委員会ではいろいろ雑談をするわけです。私にとって女性の置かれている現状や西洋女性史や現代の女性問題などは知らないことが多かったので、雑談で話が盛り上がって、「今度はこの人の話を聴きたい」「今度はこの人を呼びたい」ということが次から次に持ち出され、シンポジウムにつながっていきました。また、以前は女歴研に集う先生方だけでなく、職員の方も一緒に自由な議論をしようと張り切っていたので、活発で深い話し合いができたように思います。

そういうフランクに話ができる運営会議があったことが、女歴研を存続させた大きな力になっているのではないのでしょうか。それも、今回の座談会の初めに出てきたように、リベラルな雰囲気を持っている教授会のメンバーと、教員も職員も女性が多かったし、仕事もチャキチャキやっている人がたくさんおられたので、会議では「じゃ学部の学生はどんな反応なの？」ということも聞けました。運営委員会の日常的な議論が、女歴研を支えた大きな力になっていると思います。

【鎌田】

女性教員の出産も次々とあって、たぶんそこはお互いの申し合わせ

で、「私はこの授業は休むけれども、復帰したらここを頑張る」とか、また、実際そういう融通もできたのではないかと思えます。日本の一般社会にある「産休は会社にとってマイナスになる、負の要素である」という発想を変えないといけない。いまだに「女性は産休みたいなマイナス要素があるから、なるべく専任では採用しない」というような考えがあるのでしよう。一九七〇年ごろの橘女子大学において、高齢の男性教員はそれらの問題に直面しながら「これは当然の出来事であって、きちんとプラス面を見て、できないのではなく『こうしよう』というふうにとらえよう」というような実践があったのだらうと私は推測しています。

【田端】

大学設立当初は教授会が紛糾しました。大学をどのような方針で運営するかがまだ定まっていなかったから、原則論から必ず反対演説をする人もたくさんいました。でも、原則論から展開されるので聞き流すわけにはいかず、必ず反論することも必要で、教授会は長くなったのです。しかしそれも限度があるので、四年目くらいから、議事運営をスムーズにして早く終わらせるために議長を決めようということになって選挙が行われ、選ばれた三人の議長は全員女性でした。これで教授会は五時ごろには終わるようになったのです。

【鎌田】

それは当然ですね。男性は自分のためになら十分時間を費やしてい



志賀 亮一(しが りょういち)

京都橘大学名誉教授。

東京都立大学大学院人文科学研究科仏文専攻博士課程。文学修士。

専門：現代フランス文学、ヨーロッパ・アメリカ女性文化史。

研究課題：「ヨーロッパ・アメリカ女性史と歴史学の方法論(女性史、性別役割、ジェンダー)」

主な業績：『現代文学理論を学ぶ人のために』(共著)(世界思想社、1994年)、『女性史は可能か』(ミシェル・ペロー編)(共訳)(藤原書店、1992年)、『女のイメージー図像が語る女の歴史』(共訳)(藤原書店、1994年)、『女の歴史I～V』(G・デュビイM・ペロー編)(監訳)(藤原書店、1994～2001年)など。

いという発想ですが、女性は家庭に帰っていろいろなことをしなければいけないし、専門分野の研究もしなければいけないから、時間的に追いつめられていますから。

### 【増測】

そういう状況はいまも基本的に変わっていないけれども、昔は「家は女性がやって当たり前だ」という風潮がありましたね。若い人はだんだんそうではなくなっていますが、いまも保育園のお迎えはお母

さんが中心という状況がかなりの割合で続いていますから、昔はもっと大変でしたでしょうね。

さて、志賀先生は第三プロジェクトで「西欧女性史研究」をテーマに活動をされていました。そもそも第三プロジェクトが始まったきっかけ、あるいはその頃の流れについてお話ししていただけるでしょうか。

### 【志賀】

私の場合は、大学に共同研究費制度ができたときに、杉村先生と二人で「フランス関係の歴史の勉強会をしようか」という話から始まったのです。

それで何をしようかと言っていたら、ヨーロッパの女性史のシンポジウム「女性史は可能か？」があつて、その記録が出されました。そのときに、たまたま縁のあつた藤原書店から「これ『女性史は可能か』(ミシェル・ペロー編 藤原書店、一九九二年)を訳してみないか」という話になったのです。それで、研究会をつくって集団で翻訳をしようということになりました。

ただし、分担して訳したものをそのままとめるのではなくて、主宰者である専任の私と杉村先生が原稿を全部見て、全部チェックする。それをまた本人に送り返して、再度本人がチェックしたものを最終的に活字にする、というかたちでやろうということになりました。

それで、『女性史は可能か?』という本が藤原書店から出版された。そこが始まりなのです。

その後、女性歴史文化研究所ができるかできないかの頃に、私のところに藤原書店から、「ヨーロッパのものすごい女性史の本が出た。その版權を取ったので当社で出版したいが、全部出すと我が社はつぶれます。したがって、全五巻を二巻くらいのダイジェスト版にしたい。ついては、全五巻の目次のコピーを送るので、目次だけ全部訳してくれ」というような依頼が来ました。それで私が、一カ月くらいかけて目次だけを訳したものを藤原書店に送ったら、電話がかかって来て、「社運をかけて全部訳すことに決めました」と(笑)。

二、〇〇〇ページくらいありますから、「ちよつと待ってください。杉村先生にも相談しなくちゃ」と言い訳をしようとしたら、藤原書店の社長は「いや、杉村先生には快諾をいただいております」ということで、引くに引けなくなりました。私は一瞬、ハメられたという気もしたのですが、全部訳すのはいいことですから、「では、やりましょう」と。

この出来事と女性歴史文化研究所の発足の時期がほぼ重なったので、「それなら、これもプロジェクトに入れてもらって、連絡調整等も研究所の職員の方々にやってもらったりしながら進めたらどうだろう」ということで始まったのです。

#### 【田端】

研究所の成果は、シンポジウムにせよ女性歴史文化研究所紀要にせよ、大学の紀要とは少し違います。女性史・女性学研究を目的とした大学の本質を外に向かって発信し、表明する媒体だから、シンポジウ

ムも、プロジェクトも、紀要も、ぜひ今後も続けてもらいたいけれども、いまは、設立の頃の熱気あふれる時期とは違います。学部も増えているので、今後は、学内にいる方が主体になってどういうふうにするかを検討してほしい。

いちばん大事なのは、女性歴史文化研究所設立のとき、歴史学で研究が進んでいなかったのが「女性史」だったということです。中世の將軍家の話は出てくるけれども、その御台所の話や一般の女性の話は出てこない。女性商人もたくさんいるのに、そういう研究はほとんどやられていない。そういう状況だったから、女性史は歴史学研究の盲点であり、弱点だった。つまり、これからの研究分野が女性史だったのです。その意味では、当然、これからの研究が進んでいい分野だと思います。社会的な要求にしても、女性の地位は、現代社会では少しは良くなったとは言え、まだまだ男女平等に達していない分野が多い。男女同一労働・同一賃金もだいぶ前からとなえられているけれども、まだ実現していない分野が多く、女性の仕事は補助的作業だと見なされている部分も多いと思います。

同じ分野で同じ仕事をしているのなら同一労働・同一賃金にすべきだと思われ、非常勤や時間給で働いている人たちは圧倒的に女性が多いから、まだまだ女性問題は社会問題でもあるわけです。

そういう部分の理論的な背景として研究所があるわけで、今後追究していくべき課題は多いのではないかと思っています。





増渕 徹(ますぶち とおる)

京都橘大学文学部歴史学科教授/女性歴史文化研究所所長(第九代)。

東京大学文学部第二類(史学)卒業。文学学士(東京大学)。

専門：日本古代史・文化財保護行政史。

研究課題：「出土文字資料に関する研究」「平安時代史研究」

主な業績：『史跡で読む日本の歴史5 平安の都市と文化』(共著)(吉川弘文館、2010年)、『京の鴨川と橋』(共著)(思文閣出版、2001年)、『京都の女性史』(共著)(思文閣出版、2002年)、『日本の時代史30 歴史と素材』(共著)(吉川弘文館、2010年)、『医療の社会史一生・老・病・死』(共著)(思文閣出版、2013年)など。

### 【鎌田】

いま言われたことは、いま現実に直面している問題でもあり、これからの問題解決のために研究して、社会に対して問題提起していくべきことだと思います。

日本は一見したところ経済が繁栄しているように見えるけれども、社会が不安定になると、割りを食うのは誰かという問題があります。社会的激震が生じたら、非正規雇用などの弱者が真っ先に切り捨てられます。そのため、今月の給料さえ入ってこないという現実に向き合っ

ている女性がたくさんいるわけです。

いまふと思ったのですが、いま本学の学生がそういう問題を学習する科目はあるのでしょうか。ジェンダー学という名前が出始めた頃、私は女性問題として教科をいくつか担当したことがありますが、そういうのも大学生に必要な科目ではないでしょうか。社会にいきなり出たらわからないことが多くて戸惑うことがいっぱいあるだろうし、いまの時代はなおさらかもしれません。

### 【増渕】

これは私の反省でもあるのですが、女歴研のプロジェクトやシンポジウムを見ても、昔のほうが、外国の話聞く機会などがいっぱいありました。たとえば小野和子先生(当時、歴史学科教授。女性歴史文化研究所第二代所長)がおられるときには中国の女性の問題を扱ったり、外国の女性史研究者を招いて話を聞いたりしました。いまは松浦先生がイギリスの女性史で頑張ってくれていますが、昔のほうが視野の広い活動をしていましたように思います。

授業でも植木壽子先生(当時、歴史学科教授)に女性問題を扱うゼミを開いていただいたこともありました。カリキュラムも授業時間の設定もけっこう柔軟に、その先生でなければ語れないような時間を設定してみたり、あるいは学生の要望に応じて女性に関わるような科目を設定してみたり、そういう意味での柔軟性は昔のほうがあったかなという気がします。

【田端】

講義科目に「現代社会と女性」があつて、それとは別に「一般教養ゼミ」では、その先生の得意としている分野で、もう少し踏み込んで女性問題を考えることができました。文学部の各分野の学生が聴いてくれましたね。いま私が担当している講義「日本女性史特講」は、歴史学科と日本語日本文学科の学生くらいしか受講生がいないので、「昔はもっと多様な学生が授業を受けていたのに」と思ったりします。

【増測】

外国語にしても、あの頃はフランス語の授業も、ドイツ語の授業や中国語の授業などもあつて、複数の外国語を教えてもらいながら、先生たちもその言葉の後ろ側にある何かをプラスして教えてくれていました。その点では、女子学生に教えるそれなりの教養の幅が維持されていたような気がします。

いまのほうが逆に、大学のカラダは大きくなったし、それぞれの専門はいつぱいできたけれども、そこだけになってしまつていて、それは果たして橘の伝統を生かしていることになるのかなというのは、私自身の反省も含まれていますね。

【鎌田】

（規模が）大きくなった大学でどういう教育をして、どのような学生を育てるのか。広い視点に立ってそれをオーガナイズする力が必要だということですね。

【増測】

活動の中心となる文学部をみると、女性教員も実は減つていて、文学部単科の頃のほうが女性教員が多かったです。女子教育から始まった教育を、いい意味でどのように伝統化していくのか、橘の個性として生かしていくのか、という点から見ると、けつして胸を張れるような状態ではないなというのがありますね。

【鎌田】

その問題は大きいですよ。蒸し返しになりますが、採用人事のときに女性のマイナス評価は何かとことです。人事権を行使する人たちがいまだにジェンダーバイアスにとりつかれていたら、そういうことになるのではないのでしょうか。

【増測】

女性労働を軸のひとつにして経済的な分析をしたらどうなるのかというの、聞いてみたい気がしますね。たとえば子育ては、時間を取られる点だけを見ればハンディだけでも、そのハンディを別の面から見ると、子育てをすることによって生じる経済的利益もどこかにあるはずで、そっちのほうから見た場合にどんなモデルが構築できるのかということですね。

本学も女子大学のころは女性の視線を表に出した打ち出しをしていました。初めて複数学部にしたのは文化政策学部を作ったときですが、女子大学で政策系はまだなかったから、とくに「文化政策」

という名称にして、女子大学ならではの特色を打ち出そうとしていました。

【田端】

文化政策学部に大学院ができたとき、以前の女子大時代の歴史学科の卒業生が、たくさん院生として入学してくれたのも、新しい分野での学問・研究を求めて大学に戻ってきてくれたためでもあると思います。

【増測】

共学になった後、その歴史をいい意味でどう踏まえていくかというときに、「自立・共生・臨床の知」という新しいキャッチフレーズはつくったけれども、カリキュラムの構成はどうなのか等の現実の議論が十分に行われないうまま、「この学部・学科をつくるから、このカリキュラムでなければいけない」というのが先に立ったので、大学全体のカラーの中ではピントが少しボケてしまったところがあるのかなと思います。

【志賀】

いま考えると、広い意味でのジェンダー研究を教育や研究の一角として残しておくべきだったのでしょうかね。

【増測】

そうでしょうね。特に社会科学で経済や経営を考えたときに、橘ならでは、女性に視点を据えたような経済学・経営学のある部分を勉強したとなれば、おそらく他の大学にはない学生の学びの経験として主張できるものになったかもしれない。そこはいま考えると、残念な気がします。

【田端】

私が学長をしていたときは、看護学部を設置する、それで共学になるというので、学生大会まで開いて、夜遅くまで学生からの質問に答えたりしていました。その時、その時はよかつたけれども、それ以後の見通しを立てずに、目標だけ「自立・共生・臨床の知」というのをつくって、安心してしまったというところがあったように思います。

現在では、男子学生を主とした学部構成の新学部がたくさんできているから、その時々で教学理念を練り直してもらわないといけないかたのではないか。時代に合った、意味内容を持ったカリキュラムと連動した教学理念などについて、現教職員のみなさんには議論してほしいと思います。

【志賀】

あらゆる物の見方に性別というバイアスがかかっているでしょう。それを教育の根幹に据えて、そういうバイアスがかかっているということを教育の一角に据えてもいいと思うのです。

なぜ私がそんなことを言うかというところ、『女の歴史』I～V(ジョルジュ・デュビイ、ミシェル・ペロー監修/杉村和子・志賀亮一監訳/藤原書店/一九九四年)二〇〇一年を訳したときに、それまでのフランス女性史研究の流れを簡単に解説した部分があって、やっぱり最初は歴史に女性がいなかった。だから、まず女性を掘り起こせということから始まった。一つは名前の残っている女性をもっとくわしく研究することと、もう一つは名もない女性たちが遺した記録を発掘して出版するというのが最初だったので。

そうした名もない女性たちの日記などを一〇〇冊くらい復刻した時期があって、それがだいたい進んでくると少し変わって、『女の歴史』、原タイトル『西洋女性史(イストワール・デ・ファミ・アン・オクシダシ)』は、要するに女性に関する言説の歴史書なのです。つまり、掘り起こすのではなくて、女性はどうのように見られてきたか、誰が女性像をつくったか、というほうに移ってくる。それが一定の成果を出してまとまったのが『女の歴史』だったので。

そうすると、要するに男と女という分け方、特に古い時代は男性が「女はこうあるべきだ。男はこうあるべきだ」というふうに考えたものが、そのまま真実のようにずっと受け取られてきて今日に至っているという話があって、私が興味を持っていて悪女(フランス語で「ファム・ファタル」)の話は、もともと中世のキリスト教の坊さんや神学者たちが創り出したもので、男女には完全に格差があって…というのがつながつて、それが真実だと思われている。でも、それは実は一部の男性が考えた女性像だということが明らかになってくるような時期の

研究だったので。

そういうふうに、みんなが当たり前だと思っている性差が、実は創られたものなのだとすることを教える授業が、いろいろなジャンルで複数あってもいいなという気はします。

#### 【田端】

そうですね。現代社会に生きている学生を教育するのだから、ジェンダーは「文化的・社会的性差」と訳されているように、社会の中でつくられた性差だから、それは勉強しないと正しい知識が得られず、正しい判断ができない、つまり男女を問わずこの社会の中ではちゃんと生きられないと思います。

#### 【増淵】

教養科目群の中に女性やジェンダーをテーマにした一つの枠をつくって、三つぐらいの科目を配置して、「この枠の中から、せめて一科目でもいいから取りなさい」という履修体系があってもいいかもしれません。そうすれば、「橘らしい」と言われる教育の組み立てができるだろうという気がします。

そういう科目があるということ踏まえて、各学部・学科の教員が自分の授業の中で少しでもいいから、そういう問題意識で一回くらい授業を組み立ててくれるようになれば、まただいたい違うのかなという気もします。

【志賀】

それと、さつき増測先生の発言に少し引つかかったのですが、女性の先生がいとおっしゃいましたよね。やっぱりジェンダーを研究する男性の研究者をつくらないといけない。

「女性史の問題は、女性の問題ではなくて実は男性の問題でもあって、男性の中に性差を研究する人が増えないと学問自体が絶対に発展しない」という話を誰に聞いたのか覚えていませんが、それもそうだなと思います。

【鎌田】

一九九〇年代に伊藤公雄先生(大阪大学名誉教授)や中村正先生(立命館大学教授)などが「男性学」を講ずる活動をされました。中村先生には本学でも講演してもらって「男制学のすすめ」一九九六年七月開催。

「男制」とは、オスと生まれた生物が男になっていく過程で、制度がつくりあげる男性という意味」(クロノス」Vol.5参照)、とても新鮮な話題だと感じました。だけど、男性学と言うと男の人は聞くのも嫌だというふうには、プライドが非常に高いから自分が責められているように感じられるかもしれません。だから、そういうアプローチでは限界があるのだと思いますね。二十一世紀に入り、広くジェンダー学というジャンルからの新たな学問的研究が進展しました。

【北川】

女性学から一時期、男性学に広がり、そこからさらに「ジェン

ダー」という言葉で語られるようになり、対象の幅が広がりましたね。

【増測】

幅がかなり広がってしまって、LGBT、さらに最近はQが付いてきました。そうなってきた、逆にそれに全面的に対応しようとする、女歴研ではちよつと力不足だし、そこはまず無理だろうと思います。

【鎌田】

研究所として取り上げておかねばならない問題だと思うのですが、LGBTの問題は、フランスの家族関係における重要課題となっているようで、フランスの法社会学者イレヌ・テリーが書いた『フランスの同性婚と親子関係―ジェンダー平等と結婚・家族の変容』(明石書店/二〇一九年)や、ジェローム・ポーレンの『LGBTヒストリーブック 絶対に諦めなかった人々の一〇〇年の闘い』(サウザンブックス社/二〇一九年)は、LGBTの問題とも関連してわたしたちの思考に大きな示唆を与えてくれます。日本でも、いまの価値判断では早晚現実に対応できなくなりますが。

【増測】

女歴研を「女性文化、女性史」のみの枠にはめ込んではいけませんよということですね。



【田端】

私からすれば、女性史だけの研究所だったら、ものすごく息苦しいと思うのです。卒業生が現代社会に放り出されたときの生き方を教える必要がある、学生は真剣に取り組まないといけないから、一般教養科目の「現代社会と女性」では、他学科の先生方を全部巻き込んで開講されました、「いま歴史学研究で本当に手薄なところは女性史である。他分野でもそうに違いない」ということで、大学の今後のあり方を議論する際には必ず女性史・女性学を置くことを考えてほしいと思っていました。また、この分野の講義は他の人から聞いた知識とは別に、史・資料にあたって調べる必要があります。

だから、女性歴史文化研究所ができたとき、当時の学長に「これから研究所にも図書館とは別に、いつでも本を閲覧できるように置いておかなければいけない」とお願いしたこともあります。

【鎌田】

私はもともと、女性だけを対象としてとらえるのではなくて、人間全体をとらえないとだめだと思っていました。出発の時点で、大学の特色として「女性史・女性文化」を据えて、そこからさまざまに問題点を挙げたのはよかったです。

【志賀】

流れとしては、そこが突破口となって、『女の歴史』のペロー先生などは「男性と女性の関係の歴史だ」と言い出しました。そういうふ

うにいくと、性差がどのようにできてきたのかといった関係をメインに据えた研究ができるようになってきたので、その辺を大学の教育の場に反映できないかなという気はします。

【田端】

教員には研究やシンポジウムでの成果を授業に活かさなければ意味がないという考え方が必要です。では何を研究したらいいのか、それぞれの構成員の方に考えてもらって授業と連動させる、そういう研究所にしてもらったらいいと思います。いま研究所の活動を振りかえってみると、プロジェクトも多様だし、構成員が少ない中でよくこれだけやれたなあと思います。シンポジウムも、他大学の方や研究機関や政府の元役人の方を呼んで、ものすごく多様にやれています。

そういう観点からいうと、女性の歴史と文化の研究ではかなりの成果もあげてきており、社会的評価も得ているのだから、研究内容に合った、あるいはシンポジウムやプロジェクトの内容に合うように、女性歴史文化研究所という名称を変更してもらってもいい。けれども初期女歴研の精神は「変化する時代のなかで女子学生が卒業したらどういう生き方をするのがよいのか、それを授業の中に取り入れて話していただきたいし、もつとくわしく知りたかったら研究所の紀要も読んでほしい」ということで活動したわけで、そういう精神だけは忘れないでいてもらえたらありがたいなと思います。



写真2 女性歴史文化研究所広報誌「CHRONOS(クロノス)[時の鳥]」

市民・学生に、本学教員や研究所の研究成果を親しみやすく発信する広報誌として1994年10月に創刊。現在までに46号を発刊している。

【増潤】

歴史文化は、「歴史」と「文化」で人間社会のかなりの範囲をカバーできますので、言ってしまうえば何を対象にしてもいいという意味ではすごく取り扱いやすい名称なので、使い勝手がいいかなと思います。

また、取り組んでいる研究がイメージしやすいということも大事です。わかりやすさの点からも名称を将来どうするかは難しい問題ではあるでしょうね。

ただ、研究所である以上は、研究紀要やシンポジウムの形で成果を発信し続けなければいけないし、それがないとそれこそ「何してるの？」ということになってしまいます。やっていることをわかりやすい形でいろいろな人と共有しようという点ではシンポジウムは効果的な方法で、実際に固定的なファンがかなりついているとも言えますの

で、本学の発信の手段としても重要な一つであると思っています。

問題は、いま『クロノス』のような形で広報誌を発刊していますが、外部機関に送っても、「うちは電子的な方法で受け取るようになったので、もうご送付はけっこうです」というところもだいぶ増えてきましたから、手段も含めて考えなければいけない。

ただ、よりくだけた形で、われわれが考えていることや話題などを提供していくという点では、『クロノス』の自身はけっこういい線を行っているのではないかと思います。

だから、媒体としてどうなのかという問題はあっても、続けていかなければいけない仕事の一つだと思います。問題は、もう少し自身の幅を広げていきたいということで、他の学部・学科の方にご協力を願わないといけないと思っています。

【北川】

『クロノス』は、その時代ごとのトピックということになるので、バックナンバーを見ると「この当時はこんなことが話題だったんだ」ということも見てとれるし、海外の情報なども入っていたり、日本史、世界史、日文など幅広いテーマで載っていて、読みやすくまとまっています。

ただ、『クロノス』はホームページでも公開していますが、知っている人しかアクセスしないので、いくらいろいろなことを情報発信しても、なかなか広がりがないという問題があります。

ウイングス京都のような女性センターや図書館などには『クロノ

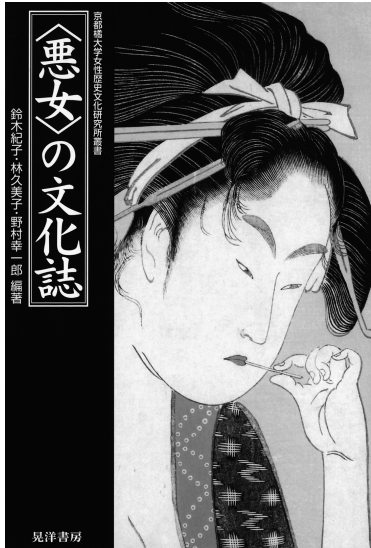


写真3 『悪女の文化誌』（京都橘  
大学女性歴史文化研究所叢書／鈴木  
紀子・林久美子・野村幸一郎編  
著／見洋書房／2005年）  
第7プロジェクト「文学に見る『悪女』観の形  
成」の研究成果として刊行された。

ス』を複数部送っているのです、そういうところでは持つていつてくだ  
さる方もいると思いますが、特にいまはコロナのため、配架をしてい  
ないところも増えているので、一般の方々への発信力が少し落ちてい  
るかなという気はします。

#### 【鎌田】

シンポジウムや講演会ということでは、私がいままで参加した中で  
よかったと思うもののひとつに、田中貴子先生（当時、京都精華大学助  
教授）の称徳天皇と道鏡についての衝撃的な内容の講演があります（二  
〇〇一年六月開催。「日本における『悪女』—称徳天皇と道鏡」。書き残さ  
れた歴史の資・史料を基に田中先生が明快な見解を展開されて、とに  
かくおもしろかった。そこから第七プロジェクト「文学に見る『悪  
女』観の形成」が作られて、のちに『悪女』の文化誌』（見洋書房／  
二〇〇五年）が出版されました。

私は、西洋の悪女（ファム・ファタル）はどのようにして作られるのか  
というテーマを担当したのですが、楽しく書き上げたという記憶があ  
ります。

#### 【志賀】

ユディットという有名な悪女は、もともとはユダヤ民族を救った英  
雄の女性でしたが、だんだん曲解されて、女の魅力で將軍を引張り  
込んで首を斬ったという悪女になってしまいました。

でも、聖書を読むと、そんなことは書いていない。英雄で、しかも  
一〇〇年以上生きたと書かれている。聖書で一〇〇年以上生きるとい  
うのは、要するに偉人の代名詞みたいなもので、それがだんだん悪女  
になっていく…。

#### 【鎌田】

世間がそういうふうに仕立てあげるといふか、まさに捏造ねつぞうですね。

#### 【増淵】

前半で鎌田先生から課題のようなものをいくつか提示していただき  
ました。

一つは、昔は運営委員会に各学科から出てきて、あるいは事務の人  
も加わって、日常的にいろんな問題を話題に話をしていて、その何人  
かで共通の話題にできそうなものをシンポジウムやプロジェクトで検  
討してきた。そういう点からすると、いまの女歴研の活動にはかなり

課題が多いとお感じでしょうか。

現在は、女性歴史文化研究所運営委員会は、文学部中心にやっております、歴史、日語日文、歴史遺産、児童教育の四学科から委員に出てきていただいています。

#### 【志賀】

運営委員を出す核は歴史系になると思いますが、全学部から出すと数が多すぎるから、たとえば輪番で必ず他学部から一人は出すと。任期は二年ぐらいで、大学全体で必ず他学部から一人出すという組織にしてもらわないといけない。

#### 【北川】

現在は規程上、運営委員は所長任命の五人となっているので、どの学科からでも委員になってもらうことができます。

ただ、女歴研は、文学部附置ではなく大学附置の研究なので、本当は全学部の教員が対象ですが、その意識があまりないように思います。

#### 【志賀】

意識がそれなら、先に制度をつくって、無理に追い込んでしまわないとできない。一学部でも二学部でもいいから、ちゃんと代表を出せという制度にしたらいい。

#### 【増測】

女歴研の活動が展開しやすいのは、核になる学部が明確だからです。研究所開設当時の三学科(英語英文・国文・歴史)のうちの二学科は文学部に残っていますし、文化財(現・歴史遺産)学科もその流れの中で関わってきましたから、現在の文学部三学科(日本語日本文学・歴史・歴史遺産)が中心になるのは流れとして必然ですし、教員もそういう意識を持っている。それは運営のしやすさの一つの要素ですね。

そこにどれだけ他学部の人たちに加わってもらうか。いま発達教育学部から加わっていただいています。保育士や教員の職場こそ、保育士の大半は女性だし、小学校の教員も半分以上が女性で占められている。そういうところを見ると、発達教育学部から入っていただけるというのは、むしろ趣旨にかなったことだと思っています。

心理学科は、恒常的に入ってほしいぐらいです。つまり、心理学科は、男性か女性かに関わらず、社会に生きるさまざまな人びとの問題を扱っているわけで、だからこそ気づかなければいけない点を指摘してくれるかもしれない。

#### 【鎌田】

女性の自殺が多くて、コロナ以前から高齢女性の自殺率が高いという問題にしても、社会学や教育学、文学ジャンルだけではなく、医療や福祉の現場で実際にそういう問題に関わっている人たちからどんどん出てほしいと思いますね。

【増渕】

それが前半でおっしゃった今後の課題ですね。女性歴史文化研究所は三〇年間の活動があり、いままでいろいろな問題提起もしたし、それなりの研究成果も出してきた。けれども、じゃ社会が変わったかと言えば、むしろ基本的な問題こそ潜在化し、深刻化していることが今回はっきりしたのではないでしょうか。部分的な環境改善はあったかもしれないけれども、根本的な改善にはつながっていないんじゃないか。そういう問題意識を持って研究所で活動しなければいけない。そういう課題をおっしゃったのですね。

【志賀】

大学組織も、過去の研究分野だけでなく、関係ないところからも引っぱり込むという体制をつくったほうがいいと思う。女性歴史文化研究所の位置付けを考えて人事配置等をするということを、トップに考えさせないといけない。

なぜ理工系に女性研究者が少ないか。特に日本はその傾向が強いからです。以前は、女性は理工系の思考に向かないと思っ込んでいる人が圧倒的に多かったのですが、ヨーロッパでは最近、「どうもおかしい。女性の自然科学研究者を増やさないといけない」という方向に動いているようです。

でも、日本はまだそこまでいっていないらしい。だから、女性歴史文化研究所は工学部も引っぱり込まないといけない。理工系もいつまでも現状のままではいられないのだから、一見したところ関係なさそ

うな研究分野の学部からも出すように、組織問題として考えたほうがよいと思う。

【北川】

女性歴史文化研究所を今後も続けていくのかどうかと考えた時、たとえば、「女性に特化した研究はもう必要ないだろう」と思っている人がいるかもしれない。もし、「女性歴史文化研究所は三〇年間活動を続けてきたが、そろそろ役目を終えて幕を下ろしてもよいのではないか」と思われているとしたら、「いや、こういう理由で必要ですよ」と言わなければいけないと思います。

これから女性歴史文化研究所はどのような役割を果たすべきでしょうか。

【田端】

以前、研究所が『枚方の女性史』（ドメス出版、一九九七年）を出版したとき、講演会をしました。そのとき聴いていた男性の友人が敦賀について、「こんなことを枚方でやってるんや。すごいが出てるよ」と言うと、「敦賀でも作りたい」ということで、『枚方の女性史』に触発されて「敦賀女性史をつくる会」ができて、敦賀にも一度呼ばれました。そういう波及効果もあります。

【北川】

当時の枚方市の職員の方がすごく熱意があつて、「ぜひ枚方の女性



史を作りたい」ということで、市役所、枚方のワーキンググループの方たちと一緒に聞き取り調査などの活動を行いました。ところが、途中で人事異動があり、その後、流れが変わってしまった。結局、『枚方の女性史』以降、女性たちが活躍する場は少なくなつたような印象があります。

だから、そのときにいくら盛り上がってすごい成果を出しても、組織が続かなければ、そこで終わってしまう。その点、女歴研は以前のような活動はできていませんが、続いている。そうやって、活動を続けていくことに意義があると思います。

#### 【鎌田】

私は、京都橘大学から女性歴史文化研究所が消えてしまったら、社会に向かって何も問いかけない総合大学であり、外から見た橘は何の特色もないものになってしまうと思います。

#### 【田端】

そうですね。特色をなくせば、他の大学と同じになってしまう。研究しないで教育だけする大学教員なんて考えられない。研究機関として、また大学として、どのように研究をし、どのように学生を教育していくかということを考えたら、特に教育においては、「女子学生であれ男子学生であれ、現代社会で生きて働いて家庭も営むためには、老人介護も含めてジェンダーの問題に必ず突き当たるのだから必修科目である」というふうに言っていくのがいちばんいいのではないかと

思っています。

#### 【鎌田】

そういう教育ができる大学が、社会から信頼されて結果的に生き残っていくのかなと思います。

#### 【北川】

外部の方と話をするとき、「橘には女性歴史文化研究所があつて、いろいろ活動をされていますね。それは大学の大きな特色・強みになつていきますね」と声をかけていただくことがよくあります。

いまの流行りだからと言ってそういう分野で研究所を作ってもそれが根付くとは限らないし、三〇年間続けるということとはなかなかできないことです。女性歴史文化研究所は継続して活動して、目に見える成果を残しているの、そこが評価につながっているのだと思います。

#### 【鎌田】

京都に五つの女子大があつても、橘だけがずっと取り組み続けている研究所があるということはすごいことだから、それを絶やすことは許されなと思います。いままでの活動を思い返しても、女歴研に勉強させてもらったことがとてもたくさんあります。その松明を若い人に渡さなければいけないという思いが、いまの私にはあります。これまで女歴研が燃やし続けてきた火が弱まってしまったら、私たち高齢者が若い人たちに伝えなければいけない使命が消滅するので、特に今

だからこそ頑張ってほしいと思うのです。

また、その使命というのは、単に個人の事柄にとどまらず、社会的な大きな問題とも表裏の関係だということを言っておきたいと思っています。

世界的な女性解放運動の第二波が一九六〇〜七〇年頃にアメリカから始まったとき、彼女たちのスローガンは「パーソナル・イズ・ポリテikal (The personal is political)」でした。「個人的な問題は、政治的な問題である」ということは、個人的事情は社会的な問題と表裏一体であるという認識であって、当時はなかなか受け入れられなかったと思います。活動する人たちはすごく頑張りました。

私が生まれたのは第二次世界大戦の最中です。小さい頃、曾祖母が近所にてよく遊びに来ていました。彼女が亡くなった後に聞いた話では、大政奉還が行われた翌年の慶応四年生まれの農家の娘で、基礎教育すら受けていないということは明々白々でした。明治生まれの祖母も尋常小学校四年までしか行っていないので、「折れ釘のようなひらがなが書ける程度や」とよく言っていました。歳をとっても、新聞をじっと見ている、たぶん漢字をとばして読んでいたのだと思います。そこからも、女子が教育を受けていないのが普通だったということがわかります。

私の身近な女の系譜は、慶応、明治、大正、昭和と続くのですが、一番シヨックだったのは、私が生まれて五年くらいまで、女性には選挙権がまったくなかったことです。

母がある時、「市川房枝さんを選挙で落とすなんて、そんなひどい

ことを！」と嘆いていました。市川さんは日本の女性参政権運動に尽力した女性解放運動家だったことや、日本の人口の半分を占める女性に選挙権もなく、国全体が戦争に突入したときも意見すら言えなかったという状況などがだんだんわかってきました。「そんなことがあるか?!」という怒りがわきました。

父が戦死した後、母は二人の幼子を育てるために小さな会社に入ったけれども、男女の賃金格差はひどく、労働時間は長いにもかかわらず残業弁当などまったくないというふうに、女性を差別し、軽く見る雰囲気があることを私は見えました。

だから、みんなは「戦争をしたらあかん」と言うけれども、なぜこうなったのかを知り、論理的に考えていかないと、いつまで経っても女性自身が「女は損や」と愚痴をこぼすだけの生き方をしなければいけないのだと私は身に沁みて感じました。だから、先に述べた「婦人問題研究会」に誘われて参加したときは、目が醒める思いでした。

いまの若い人たちが、「賃金や労働条件などは人から与えられるものではなくて、自らの問題としてとらえ、自分自身が問題解決に参加しない限り、よりよい社会にならない」ということを学んで、そのためには歴史に学ぶことが重要であるのだと訴えたいのです。

#### 【増測】

だから、やっぱり現代社会につながるような問題のプロジェクトや研究もやっていくべきでしょうということですね。

## 【鎌田】

そうです。古代から現代までの研究は、必ずさまざまなことを考えさせてくれますから。話は大学の場から少し離れますが、私が『性と生殖の女性学』（世界思想社／二〇〇六年）という本を出した時、それを読んだ滋賀県高島市の人たちが「この地域には映画館もないし、楽しく学べる講座のようなものを作ってほしい」という希望を出されました。年齢が五〇〜八〇代になった人たちが学びの場をものすごく求めておられたのです。私自身、女歴研で専門領域の幅を広げていろいろ勉強して、考える機会を与えてもらったと思うので、「高島市で初めての女性学講座」を引き受けました。

その後も続行し、講義ばかりでなく、映画や小説を題材にディスカッションするという企画を始めました。そして、先日、一〇年目の女性学が終わりました。

だから、「社会に向けて開かれた研究所」という観点から、知識を得たいという層が大学の外にいるのだということも視野に入れた活動をしてほしいと思います。

## 【田端】

女歴研は研究・教育に重点を置いています。『伝えたい想い―枚方の女性史』（枚方市発行／京都橘女子大学女性歴史文化研究所編／ドメス出版／一九九七年。本学初の受託研究として取り組まれた。以下、『枚方の女性史』のように、外から依頼される仕事もしていて、ものすごいものを作ってきました。事務局も苦勞して、多くの先生方にも手伝って

いただきましたが、あの枚方の女性たちへの聞き取りはとても貴重なものです。もう亡くなられた方がほとんどだと思いますが、枚方に砲兵工廠があつて、そこに勤めていた女性たちは、自分たち臨時雇いの人から上司までの賃金をすべて覚えておられたのです。短くまとめたけれども、枚方の人々が戦争でどれだけ苦勞したかということも一目瞭然でわかる話や、<sup>地場</sup>産業であるそうめん作りの話など、地域の人たちのそのままの姿や当時の女性たちの考えもわかる聞き書きになっています。

女歴研はそういう社会貢献もしてきて、それが私たちの財産にもなっており、私は授業でも現代の部分では『枚方の女性史』を時々引用しています。

多様な研究や発信ができるような研究所だったというのは、やはり大学全体の支えがあつたからです。『枚方の女性史』の編纂も歴史学科だけでは絶対に無理で、他学科や職員、院生も手伝ってください、ようやく完成したわけです。

その意味で、研究所が持つ意味は、外から見ると、中の人が思うよりずっと大きなものがあると思うので、たとえ組織の名称が変わっても、ぜひ続けてほしいというのが私の意見です。

## 【鎌田】

小野和子先生が研究所所長の時、第一〇回シンポジウムでノンフィクション作家の澤地久枝さんに来ていただき、私の思いを見事に表現してくださいました。澤地さんは私より少し年上ですから、悲惨な戦

争体験をされています。私などは食べる物がなくて祖母たちの「買い出し」について行ったことや、防空壕からB29の編隊を眺めた程度の記憶ですが、澤地さんの講演はすごく迫力がありました。「昭和の女性―得たもの 失ったもの―」（二〇〇一年二月開催）というタイトルで、「苦難を個人的なものとしてとらえないで、次世代に語り継いでください」という講演は、今も生きています。

それから、私がプロジェクトで活動してほんとうによかったと思うのは、一九九五年に国連の第四回世界女性会議が北京で開かれて、女性歴史文化研究所が私を派遣してくれたことです。歴史的にも有意義な世界女性会議が開かれるということで、一年ほど前から「TIME」や「Newsweek」でたくさん報道がされていて、それを授業でテキストに使ったりしていましたが、やはり実際に参加し、会場で体験した実感は強烈でした。

政府間会議には一九〇カ国の政府代表や国連機関など約一七千人が参加して、中国・北京で開催されましたが、それだけではありません。それに先立って世界中から三万人をこえる人たちが（日本からはおよそ五千人）、NGOフォーラムに集まり、五千以上ものワークショップが開かれました。

そこでは胸がつぶれるような重い問題、たとえばエイズ蔓延の犠牲は女性がものすごく多いこと、女性・子どもの性的搾取が多くの国で行われていること、女性に対する性犯罪の多発や、内乱・内戦等で「民族浄化作戦」と称して女性が武器として使われること、宗教や伝統の名の下に幼女の性器切除(割礼)が行われていることなどが報告さ

れたのです(このとき取材した「世界女性会議・NGOフォーラム参加レポート」は、京都市の広報誌『E(イー・フラット)』Vol.11(平成七年)に掲載)。

この会議の大きなテーマの一つが「リプロダクティブ・ヘルス&ライツ」でした。この認識は世界的にもある程度は浸透していると思っていたので、帰国後すぐ、一九九五年二月の第四回シンポジウムを「性と生殖(リプロダクティブ・ヘルス&ライツ)を考える―北京世界女性会議からの問題提起」とすることを提案して取り組みました。講師の萩野美穂先生(当時、奈良女子大学助教授は、すでに『生殖の政治学―フェミニズムとバース・コントロール』(山川出版社/一九九四年)を出版されていて、もう一人の講師である柘植あづみ先生(当時、北海道医療大学講師)にも参加していただきました。

このシンポジウムは、北京女性会議からの問題提起ということで、かなり力を入れました。学内の大きな会場が聴衆で埋まり、終わると寛久美子先生(当時、神戸大学教授が「こういうテーマのシンポジウムは絶対に他の大学では、私の所属する大学でもできない。女子大の研究所だから、できたのよ」と、わざわざ言いにくかったです。

「リプロダクション(生殖)」という言葉は、出産など生殖に関わるいろいろな意味を含んでいます。それを担う女性の人権や健康が置き去りにされたままで、さまざまな不幸が起きているという問題提起なのです。これをそのままシンポジウムのテーマとして設定したのですが、準備中に、「性をタイトルに出して、大丈夫か？」と注意する人がいたと聞き、脳の血管が切れるくらい腹が立ちました(笑)。「性と生殖」という言葉だけで、一部に拒絶反応が起きたわけです。その後、

『性と生殖の女性学』という書籍を出したときも、某大学の先生が、「こんなタイトルつけたら図書館も入れてくれないよ」と言われました。一方、「こういう本を出しました」と瀬戸内寂聴さんに手渡したら、「あら、このタイトルがいいわね!」と。なんとという落差!

#### 【増測】

まさに歴史ですね。いまなら、そういうタイトルは当たり前のように受け入れられます。

とにかく女歴研としてやるべきことはまだまだたくさんあって、何も終わっていないということ、先生方から宿題としていただいたということ、中間のまとめとして、「もつといろんな人に関わってもらいなさい。そうしないと問題点の掘り起こしにつながらないでしょう」ということも実際の運営上のアドバイスとしていただいたということ、よろしいでしょうか。

今後、女性歴史文化研究所はどのように活動を続けていけばよいか、参考になるような話をいろいろ聞くことができました。本日はどうもありがとうございました。  
(丁)

#### 〈対談を終えて〉

今回の対談では、女性史の分野を中心に展開している最近の活動に対する率直な批判をいただいた。女性をとりまく現代的な問題への関心なくして、研究所としての研究活動の発展はないとする意見は、誰のために研究活動を展開するのかという基本的な視点と関わるだけに、

素直に受け止めていく必要がある。学部・学科単位の専門性の高い研究を追求しながらも、他方で共通の問題意識を踏まえた研究の視点を見失ってはならないとする指摘も、研究所の活動上必要な基本姿勢であるのみならず、開学以来の本学の歴史を踏まえた個性的な研究・教育の推進の上で重要な指摘であろうと思う。(増測徹)



表1 女性歴史文化研究所プロジェクト一覧

	プロジェクト名	代 表	所 属	期 間
第1プロジェクト	歴史における家族と女性—日本と世界	細川 涼一	歴史学科教授	1993～1997年度
	出版物：『家と女性の社会史』（日本エディタースクール、1998年）			
第2プロジェクト	現代社会と女性(特別プロジェクト)	高橋 雅延 鎌田 明子	一般教養課程助教授 英語英文学科教授	1993～2004年度
	女性文化の再生産過程—母-娘関係の研究	河原 和枝	現代マネジメント学 科教授	2004～2007年度
	出版物：『母と娘の歴史文化—再生産される〈性〉』（白地社、2009年）			
第3プロジェクト	西欧女性史研究—フランスを中心に	志賀 亮一	現代マネジメント学 科教授	1993～2007年度
	出版物：『女の歴史』I～V(翻訳)(藤原書店、1994年～2001年)			
第4プロジェクト	D. H. ロレンスの愛と性	杉山 泰	英語英文学科教授	1993～1994年度
第5プロジェクト	地域女性史研究 大阪府枚方市の場合*	田端 泰子	歴史学科教授	1994～1996年度
	出版物：『伝えたい想い—枚方の女性史』（枚方市発行、ドメス出版、1997年）			
第6プロジェクト	京都の歴史と女性	細川 涼一	歴史学科教授	1998～2002年度
	出版物：『京都の女性史』（思文閣出版、2002年）、『京都と鴨川の歴史』（思文閣出版、2001年）			
第7プロジェクト	文学に見る『悪女』観の形成	鈴木 紀子	日本語日本文学科教 授	2001～2006年度
	出版物：『〈悪女〉の文化誌』（晃洋書房、2005年）、『女の怪異学』（晃洋書房、2007年）			
第8プロジェクト	女性生活文化交流史**	横田 冬彦	歴史学科教授	2004～2007年度
	出版物：『女たちのシルクロード(異文化交流と女性)』（平凡社、2010年）、 『異文化交流史の再検討：日本近代の〈経験〉とその周辺』（平凡社、2011年）			
第9プロジェクト	ホスピタリティと女性文化	松浦 京子	歴史学科教授	2004～2007年度
第10プロジェクト	歴史における女性の身体と看護・医療 —生・老・病・死—**	細川 涼一	歴史学科教授	2008～2012年度
	出版物：『医療の社会史—生・老・病・死』（思文閣出版、2013年）			
第11プロジェクト	現代の表象文化に見るトランスジェンダー	野村幸一郎	日本語日本文学科教 授	2009～2012年度
	出版物：『表象のトランス・ジェンダー—越境する性』（新典社、2013年）			
第12プロジェクト	装いと身体の歴史	南 直人	歴史学科教授	2013～2017年度
	出版物：『身体はだれのものか—比較史でみる装いとケア』（昭和堂、2018年）			
第13プロジェクト	社会における女性の活動—京都とその周辺を 舞台にして	増渕 徹	歴史学科教授	2018～2022年度 (予定)

\* 枚方市よりの受託研究

\*\* 科学研究費補助金基盤研究(B)採択

表2 女性歴史文化研究所シンポジウム一覧

(1)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第1回	1992年12月3日	女性史の新時代をめざして —女性史研究の現状と課題—	マーティン・コルカット(アメリカ・プリンストン大学教授)、パトリシア・ツルミ(カナダ・ヴィクトリア大学教授)、脇田晴子(大阪外国語大学教授) コーディネーター: 田端泰子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)、杉村和子(本学文学部教授)
第2回	1993年12月4日	おんな・女性・歴史と現在・・・	
		第一部「大学生の性別役割意識をめぐって」	調査報告: 高橋雅延(本学文学部助教授) 井上章一(国際日本文化研究センター助教授)、田端泰子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
		第二部「絵解き—形象としての「女」たち」	細川涼一(本学文学部助教授)、鈴木紀子(本学文学部教授)、浅井雅志(本学文学部教授)
第3回	1994年12月3日	現代の家族と女性—近代家族制度の崩壊は、女性に何をもたらすか	高桑法子(同志社女子大学助教授)、浅岡美恵(弁護士)、野川照夫(本学文学部教授)、鎌田明子(本学文学部教授)
第4回	1995年12月2日	“性と生殖”(リプロダクティブ・ヘルス&ライツ)を考える —北京世界女性会議からの問題提起	荻野美穂(奈良女子大学助教授)、柘植あづみ(北海道医療大学講師)、鎌田明子(本学文学部教授)
第5回	1996年12月7日	ライフスタイルの変化と女性—生き方の多様性を求めて—	上掛利博(京都府立大学女子短期大学部助教授)、津村明子(大阪府立女性総合センター館長)、鈴木紀子(本学文学部教授)
第6回	1997年11月15日	大人と子供 no 空間—ジェネレーションギャップと若者文化	東靖男(ひがし心理クリニック所長)、黒瀬久美子(JFPA ハートブレイク思春期相談員)、碓井敏正(本学文学部教授)
第7回	1998年12月5日	ジェンダー研究の現在~21世紀へ向けて 作られてきた女性たち、創っていく女性たち	館かおる(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授)、米田佐代子(山梨県立女子短期大学教授)、田端泰子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第8回	1999年12月4日	日本文化におけるジェンダー—図像(イメージ)と言説(ディスクール)—・・・ 視る、視られる、おんな、おとこ・・・	池田忍(千葉大学助教授)、鈴木紀子(本学文学部教授)、細川涼一(本学文学部教授)
第9回	2000年12月2日	おんなの身体と装飾—近代中国と日本 私の身体は誰のもの?	羅蘇文(上海社会科学院歴史研究所研究員・女性歴史文化研究所研究員)、沢山美果子(順正短期大学教授)
第10回	2001年12月1日	昭和の女性 —得たもの 失ったもの—	澤地久枝(ノンフィクション作家・評論家)、松尾尊兌(本学文学部教授)
第11回	2002年12月7日	戦国社会と女性の役割	永井路子(作家)、田端泰子(本学文学部教授)
第12回	2003年12月6日	異文化経験と女性 —大英帝国のレディたち、『日本帝国』の主婦たち—	井野瀬久美恵(甲南大学教授)、ひろたまさき(本学文学部教授)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第13回	2004年12月4日	アジアにおける良妻賢母主義 —その歴史と現在	洪良姫(韓国・漢陽大学校人文科学大学講師)、程郁(中国・上海師範大学人文学院助教授)、ひろたまさき(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長) コメンテーター：姫岡とし子(立命館大学国際関係学部教授)
第14回	2005年7月2日	ミシンと女性と経済	アンドリュウ・ゴードン(アメリカ・ハーバード大学教授、ハーバード大学ライシャワー日本研究所前所長)、中谷文美(岡山大学文化科学研究科助教授)、松浦京子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第15回	2006年12月9日	織豊政権期の男女像とその規範化 —山内一豊・千代を中心に	小和田哲男(静岡大学教育学部教授)、長野ひろ子(中央大学経済学部教授)、田端泰子(本学学長・文学部教授) コメンテーター：細川涼一(本学文学部教授)
第16回	2007年7月21日	男女共同参画社会をめざして —その歩みと課題—	長濱英子(京都府府民労働部女性政策課長)、吉田秀子(特定非営利活動法人 働きたいおんなたちのネットワーク理事長)、松浦京子(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第17回	2008年7月12日	語り物文芸と女性 —日本中世～近世にかけて—	阪口弘之(神戸女子大学文学部教授・古典芸能研究センター長)、砂川博(相愛大学人文学部教授)、細川涼一(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第18回	2009年7月4日	歴史のなかの子どもの方行方	沢山美果子(岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員) 増渕徹(本学文学部教授)
第19回	2010年7月10日	幕末・明治の京都と女性	辻ミチ子(元・宇治市歴史資料館館長『わたちの幕末京都』『和宮』著者)、高久嶺之介(本学文学部教授)
第20回	2011年6月25日	日本中世における女性の生活と表象	保立道久(東京大学史料編纂所教授)、田端泰子(本学名誉教授) コメンテーター：細川涼一(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第21回	2012年7月28日	近代女性の社会史—日本とドイツ	横田冬彦(京都大学大学院文学研究科教授)、南直人(本学文学部教授)
第22回	2013年6月15日	江戸時代の病氣と女性	鈴木則子(奈良女子大学大学院生活環境科学系教授)、有坂道子(本学文学部准教授)
第23回	2014年6月21日	近代社会の病氣と女性	松浦京子(本学文学部教授)、高久嶺之介(本学文学部教授)
第24回	2015年7月11日	近代と働く女性たち	佐伯順子(同志社大学大学院社会学研究科教授)、松浦京子(本学文学部教授)
第25回	2016年7月9日	近代ヨーロッパ社会における身体表現と身体ケア —食とファッションを中心に—	北山晴一(立教大学名誉教授)、南直人(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)

	開催日時	テーマ	パネリスト・講師
第26回	2017年6月24日	食と歴史のジェンダー —日本とアジア—	原田信男(国士舘大学21世紀アジア学部教授)、阿良田麻里子(立命館大学客員教授)、南直人(本学文学部教授・女性歴史文化研究所所長)
第27回	2018年7月7日	発信する皇女たち—斎王を中心に	榎村寛之(三重県斎宮歴史博物館学芸普及課長)、野田泰三(本学文学部教授)、増測徹(本学文学部教授)
第28回	2019年7月6日	近代ヨーロッパにおける女性の社会進出 —イギリスとフランスの事例から	松田祐子(大学非常勤講師)、松浦京子(本学文学部教授)、渡邊和行(本学文学部教授)
第29回	2020年6月6日	考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止
第29回	2021年6月19日	歴史の中の女性を読み直す —女性史研究のいま—	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止
第29回	2022年6月18日	考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族	※開催予定(2022年3月現在)。 阿部千春(北海道庁世界遺産推進室特別研究員／元函館市縄文文化交流センター館長)、中久保辰夫(本学文学部准教授)、増測徹(本学文学部科教授)

※2020・2021年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催中止となった。

「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

表3 女性歴史文化研究所 学術講演会・研究会一覧

●第1プロジェクト 歴史における家族と女性—日本と世界(1993～1997年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1993年度			
5月13日	「家族を構成する女性と構成しない女性—日本中世の場合—」	細川 涼一	本学文学部歴史学科助教授
7月22日	「中国貴族の女性—六朝～隋・唐を中心に—」	浅見 直一郎	本学文学部歴史学科助教授
10月28日	「現代中国の女性虐待事件」	蒲 豊彦	本学文学部国文学科助教授
1994年度			
6月23日	「大黒死病と封建危機—その再検討のために—」	瀬原 義生	本学文学部歴史学科教授
9月4日	「帝国議会における婦選法案の推移」	松尾 尊允	本学文学部歴史学科教授
12月6日	「書評 田端泰子著『日本中世女性史論』」	小林 善帆 大利 直美	本学大学院院生
1995年度			
7月1日	「猿橋賞について」	市川 信孝	本学文学部歴史学科教授
7月13日	「ジェンダーで『今昔物語集』を読む」	ヒトミ・トノムラ	ミシガン大学準教授
		藤井 俊博 (コメンテーター)	本学文学部国文学科助教授
9月4日	「近代イギリスの衛生思想とヘルス・ヴィジティンク」	松浦 京子	本学文学部歴史学科助教授
3月11日	「セクシャル・ハラズメントについて」	小野 和子	本学文学部歴史学科教授
1996年度			
7月24日	「能制度の固定化と能楽論の役割—『八帖花伝書』をめぐって—」	エリック・ラス	女性歴史文化研究所研究員
1997年度			
10月25日	「ドイツ中世都市における女性の生活—ケルンの絹工業女親方組合を中心として—」	瀬原 義生	本学文学部歴史学科教授
1998年度			
6月13日	『家と女性の社会史』出版記念講演会 「中世イタリヤの結婚と女性」	山辺 規子	奈良女子大学文学部助教授

●第2プロジェクト

現代社会と女性〈特別プロジェクト〉(1993～2004年度)

女性文化の再生産過程—母-娘関係の研究(2004～2007年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1993年度			
6月5日	「『大学生の女性観とその母親の女性観』」	高橋 雅延	本学一般教養課程助教授
6月26日	「『皇室事情と雅子さんの選択』」	碓井 敏正	本学文学部歴史学科教授
11月27日	「『ジョン・アービングの世界—墮胎手術は、神の業か、悪魔の業か』」	鎌田 明子	本学文学部英語英文学科教授
12月11日	国際交流のためのパフォーマンス&ミニ・シンポジウム 「ABANTE BABAE (前へすすめ! 女たち) —フィリピン女性をとおして見る現代日本とアジア—」	カラントグ&コリド	フィリピン南タガログ芸術調査訓練研究所



1994年度			
7月2日	「男らしさ・女らしさは幻想か」	鎌田 明子	本学文学部英語英文学科教授
11月12日	「渡辺恒男著『脱男性の時代』におけるアンドロジナス論」	細川 涼一	本学文学部歴史学科助教授
11月30日	「〈家族〉についての本学学生のアンケートについて分析、問題提起」	第2プロジェクト委員	
1995年度			
5月27日	「現代英国女性劇作家点描」	平田 康	本学文学部英語英文学科教授
3月30日	「ロレンスとアーヴィングにおける男女関係のあり方」	田部井 世志子	北九州大学助教授
1996年度			
7月11日	「男制学のすすめ」	中村 正	立命館大学産業社会学部助教授
11月9日	「女性差別なのに、イカサマ水子供養はなぜ女性に支持される？」	森栗 茂一	大阪外国語大学外国語学部助教授
11月16日	「フェミニズムと市場原理—能力主義原理による日本社会の再編は女性を解放するか？」	碓井 敏正	本学文学部歴史学科教授
2月25日	「現代の大学生の抱える心理問題」	北尾 敬子	本学兼任講師
1997年度			
6月30日	「私ってどういう人？自分の対人関係のパターンを知ってみよう！」	北尾 敬子	臨床心理士
7月23日	「性暴力をめぐる最近の司法判断について」	小野 和子	本学文学部歴史学科教授
1998年度			
4月15日	「実践政治家 加藤シヅエの世紀」	ヘレン・M・ホッパー	ピッツバーグ大学・カーネギーメロン大学併任準教授
5月13日	「英語における性とことば」	北林 利治	本学文学部英語英文学科教授
12月9日	「生活文化のイギリス史に見るヴィクトリアン・ライフの光と影」	松浦 京子	本学文学部歴史学科助教授
3月12日	「王朝文学に見る理想の男性像—女性的な美しさに注目して」	鈴木 紀子	本学文学部国文学科教授
1999年度			
9月29日	「生命倫理・ジェンダー・優生思想」	森岡 正博	大阪府立大学教授
10月23日	「文学に表れた家族と住まい『借家と持ち家の文学史』（三省堂、1998）とその後」	西川 祐子	京都文教大学教授
2000年度			
5月17日	「ことばが女たちをつなぐ—アフリカに生きる女たちのパワー」	楠瀬 佳子	京都精華大学人文学部教授
11月18日	「小説と映画に描かれたヴィクトリア時代の“余った女たち” 一家庭の天使、カヴァネス、新しい女とピアノ」	杉山 泰	本学英語コミュニケーション学科教授
2001年度			
5月30日	「テレビCM、アニメの中のジェンダー—外国人留学生から学んだこと」	岡本 宜子	テュービンゲン大学・同志社日本語センター日本語講師

「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

2002年度			
5月29日	「スポーツ・ヒロイン—近代女性スポーツの百年—」	河原 和枝	本学文化政策学部助教授
10月18日	「女性の“大胆さ”と19世紀ブラジルの有産階級」	マリア・ルシア・G・バラレス＝バーク	サンパウロ大学準教授
11月20日	「生殖医療と生命倫理」	池上 順子	立命館大学・龍谷大学 非常勤講師
2003年度			
7月8日	「戦争と性暴力」	ひな 海南 友子	映画監督・元NHKディレクター
9月24日	「キリスト教宣教師の見た十九世紀中国の女性」	蒲 豊彦	本学文学部日本語日文学科教授
11月26日	「婦女解放・女性史主義・性別研究—婦女解放と現代中国」	桑 兵	中国中山大学歴史系教授
2005年度			
4月22日	「王朝文学に見る母と娘—浮舟と母中将君」	鈴木 紀子	本学文学部日本語日文学科教授
12月2日	「有島武郎『或る女』に描かれた母と娘」	野村 幸一郎	本学文学部日本語日文学科教授
2月1日	「女性の「知」—『知識の社会史』から」	河原 和枝	本学文化政策学部現代マネジメント学科教授
2006年度			
12月13日	「中国における母-娘関係」	蒲 豊彦	本学文学部日本語日文学科教授

●第3プロジェクト 西欧女性史研究—フランスを中心に(1993～2007年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1996年度			
10月26日	「19世紀フランス女性のライフスタイル—“信心深い母”から“共和国の母”へ—」	栖原 弥生	愛知県立大学教授
1997年度			
11月8日	「ジャン＝ジャック・ルソーの女性観」	内藤 義博	立命館大学非常勤講師
12月9日	女性歴史文化研究所開設5周年記念講演会「フランスにおける女性史研究の現状—『女の歴史』以後を中心に」	ミシェル・ペロー	パリ第七大学名誉教授
1998年度			
10月28日	「西欧女性史研究」研究会 「フランス革命と女性」	天野 知恵子	和歌山大学助教授
2001年度			
11月7日	「ミネルヴァの娘たち—ベッドフォード女子カレッジの創設事情」	河村 貞枝	京都府立大学文学部教授

●第4プロジェクト D.H. ロレンスの愛と性(1993～1994年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1993年度			
7月3日	「D.H. ロレンスの歴史書『ヨーロッパ史の諸運動』をめぐって」	増口 充	長崎諫早高等学校教諭
		越智 武臣	本学文学部歴史学科教授

11月13日	「『恋する女たち』における破壊的要素」	門司 直子	京都外国語大学大学院院生
12月23日	「Graham Hough, The Dark Sun の第一章」	岩井 学	同志社大学大学院院生
		石川 慎一郎	神戸大学大学院院生
1月29日	「Graham Hough, The Dark Sun の第二章」	大崎 公	追手門大学学生
		恩田 幸治	広島大学大学院院生
2月26日	「Graham Hough, The Dark Sun の第三章 (Sons and Lovers)」	河野 哲二	大阪電気通信大学高校教諭
		楠瀬 健昭	大阪薬科大学助教授

1994年度

4月16日	「一史家の見たチャタレイ夫妻とその周辺」	越智 武臣	本学文学部歴史学科教授
6月18日	「一史家の見たチャタレイ夫妻とその周辺2」	越智 武臣	本学文学部歴史学科教授
7月17日	「女性論的研究に見る D.H. ロレンス」	小川 享子	本学外国語教育センター講師
12月17日	「イギリス小説と女性」	杉山 泰	本学文学部英語英文学科教授

●第5プロジェクト 地域女性史研究 大阪府枚方市の場合(1994～1996年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1995年度			
9月6日	「近現代の枚方と女性」	北崎 豊二	大阪経済大学教授
1996年度			
3月15日	『伝えたい思い一枚方の女性史』出版記念講演会	—	

●第6プロジェクト 京都の歴史と女性(1998～2002年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
1998年度			
6月10日	「『京の女性史』書評」	田端 泰子	本学文学部歴史学科教授
10月28日	「民法(財産権)のできるまで」	植木 壽子	本学文学部歴史学科教授
1999年度			
5月26日	「後醍醐天皇と神泉苑・京都の川」	細川 涼一	本学文学部文化財学科教授
7月28日	「室町・戦国期の鴨川と橋」	田端 泰子	本学文学部歴史学科教授
9月29日	「賀茂川に橋のなかつた頃—平安京以前」	門脇 禎二	本学文学部文化財学科教授
	「平安京の河川行政」	増淵 徹	本学文学部歴史学科助教授
2月16日	「16世紀の鴨川洪水と御土居」	横田 冬彦	本学文学部歴史学科教授
2000年度			
5月17日	「近世の鴨川と橋」	朝尾 直弘	本学文学部文化財学科教授
5月31日	「外から見た日本—小説『菊と十字架』」	佐藤 令子	本学名誉教授
7月1日	「祇園祭と京都の女性」	脇田 晴子	滋賀県立大学人間文化学部教授

「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

2月18～ 19日 於：丹後	「再論 丹後王国論」	門脇 禎二	本学文学部文化財学科教授
	「京の名所・風俗案内としての浄瑠璃本」	林 久美子	本学文学部日本語日本文学 科教授
	「近世宮津の女性たち」	横田 冬彦	本学文学部歴史学科教授

2001年度

6月13日	「絵画の読み方 歴史研究のために」	黒田 日出男	東京大学史料編纂所教授
-------	-------------------	--------	-------------

●第7プロジェクト 文学に見る『悪女』観の形成(2001～2006年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
----	------	---------	----

2001年度

6月5日	「日本における『悪女』—称徳天皇と道鏡」	田中 貴子	京都精華大学人文学部助教 授
6月13日	「鷲沢宮はなぜ『姦婦』か—尾崎紅葉『金色夜叉』」	野村 幸一郎	本学文学部日本語日本文学 科教授

2002年度

6月26日	「歌舞伎の悪女—『悪婆』の魅力」	林 久美子	本学文学部日本語日本文学 科助教授
2月13～ 14日	「『源氏物語』における罪を意識する女たち」	鈴木 紀子	本学文学部日本語日本文学 科教授

2004年度

7月28日	「中国文学の悪女—中国におけるいい女と悪い女—」	蒲 豊彦	本学文学部日本語日本文学 科教授
-------	--------------------------	------	---------------------

●第8プロジェクト 女性生活文化交流史(2004～2007年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
----	------	---------	----

2004年度

7月3～ 4日 於：大津 市	「日常生活の中に取り入れられた外来品—イギリスの場合」	松浦 京子	本学文学部歴史学科教授
	「シルクロード陶磁器研究の現状」	弓場 紀知	本学文学部文化財学科教授
	「『女たちのシルクロード』構想」	ひろた まさき	本学文学部歴史学科教授
9月29日	「日本(明治期)における外来輸入品と女性について」	ひろた まさき	本学文学部歴史学科教授

2005年度

5月8日	「中国宋代女性史研究の現状と課題 —柳田節子『宋代庶民の女たち』を素材に一—」	衣川 強	本学文学部歴史学科教授
6月19～ 24日	第9回学際的国際女性学会議(於・韓国梨花女子大学)シンポジウム		
	「日本近代における売春問題と『良妻賢母』イデオロギー」	横田 冬彦	本学文学部歴史学科教授
7月25日	「日本における良妻賢母主義の歴史と現在」	ひろた まさき	本学文学部歴史学科客員教 授
	「西アジアから見た東アジア—9～10世紀を中心に—」	小野 浩	本学文学部歴史学科教授
	「陶磁器の交易から見た東西世界の交流」	弓場 紀知	本学文学部文化財学科教授
	「日本近世の異国意識」	横田 冬彦	本学文学部歴史学科教授

2006年度

6月16日	「古代国家の<北>への視線」	増渕 徹	本学文学部歴史学科教授
-------	----------------	------	-------------

6月23日	「近世文人の異国趣味—中国とオランダ—」	有坂 道子	本学文学部文化財学科助教授
6月30日	「近世演劇における異国」	林 久美子	本学文学部日本語日本文学 科教授
12月18日	「文化交流史研究の課題—『朝鮮人來朝図』の図像学」	ロナルド・トビ	イリノイ大学教授
2月25日	女性生活文化交流史シンポジウム (シルクロード：描かれた女性群像—飛鳥から敦煌・ベルシャヘー—)		
	「高松塚古墳の女性たち」	猪熊 兼勝	本学文学部文化財学科教授
	「敦煌石窟寺院壁画の女性像」	王 衛明	本学文学部歴史学科教授
	「イスラームのミニアチュールにあらわれた女性像」	杉村 棟	国立民族学博物館名誉教授

●第9プロジェクト ホスピタリティと女性文化(2004～2007年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
2004年度			
9月29日	「西洋の歴史におけるホスピタリティ概念の変遷」	松浦 京子	本学文学部歴史学科教授
11月19日	「<産む>身体の位相—近世末・一関藩の懐胎・出産取り 締まりにみる—」	沢山 美果子	順正短期大学幼児教育科教授
2005年度			
10月26日	「ドイツにおける食の歴史」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
2月20日	「『おいしさ』でもてなす女性たち—近代日本における家 庭料理と冷蔵庫」	村瀬 敬子	高知女子大学専任講師
3月	「日本仏教思想に見る施しについて」	細川 涼一	本学文学部歴史学科教授
2006年度			
2月22日	「博覧会と『もてなし』」	川本 真浩	高知大学人文学部講師
3月1日	「ケア提供者としての女性—新たなホスピタリティーのか たちをめざして—」	松浦 京子	本学文学部歴史学科教授
	「日本仏教における施し観念とホスピタリティー」	細川 涼一	本学文学部歴史学科教授
	「ヨーロッパにおける外食の歴史・外観」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
	「イギリス「福祉の複合体」制にみるホスピタリティー概 念」	高田 実	九州国際大学経済学部教授
2007年度			
3月4日	「19世紀アメリカ合衆国における出産と保健政策」	小野 直子	富山大学人文学部講師

●第10プロジェクト 歴史における女性の身体と看護・医療—生・老・病・死— (2008～2012年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
2008年度			
7月18～ 19日 於：大津 市	「『motherhood』—母であること—をめぐる人びと —前世紀転換期イギリスの出産・育児の諸相—」	松浦 京子	本学文学部歴史学科教授
	「近代ドイツにおける栄養学の成立と食教育の展開」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
	「中世都市鎌倉の福祉」	細川 涼一	本学文学部歴史学科教授
3月9～ 10日	「死への眼差し—ロレンス、三島、ハイデガー—」	浅井 雅志	本学文学部英語コミュニ ケーション学科教授
	「本学所蔵・信濃善光寺門前茶屋「島田屋文書」について」	横田 冬彦	本学文学部歴史学科教授



「女性歴史文化研究所開設三〇年に向けて」

2009年度			
8月8～ 9日 於：奈良 県吉野	「日本近代の文明開化と京都の産婆研究について」	高久 嶺之助	本学文学部歴史学科教授
	「お産の歴史」	高橋 みや子	本学看護学部看護学科教授
	「十一世紀ズィヤール朝の処世訓戒—『カーブース・ナーメ』から」	小野 浩	本学文学部歴史学科教授
3月3～ 4日 於：神戸 市	「一八八一年イギリス皇孫の来京」	高久 嶺之助	本学文学部歴史学科教授
	「公家将軍宗尊親王の医師」	細川 涼一	本学文学部歴史学科教授
2010年度			
8月18～ 19日 於：城崎 市	「幕末期京都の医家と医療」	有坂 道子	本学文学部文化財学科准教授
	「『小右記』にみえる医師について」	増測 徹	本学文学部歴史学科教授
2月21～ 22日 於：滋賀 県長浜市	「中国女性史研究の現状と課題—日本・台湾・中国における—」	鳥居 一康	本学文学部歴史学科教授
	「『国産』の嗜好品を求めて—ドイツにおけるコーヒーと砂糖の受容をめぐる諸問題—近代世界システム論と食の歴史との接点—」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
2011年度			
8月10～ 11日 於：兵庫 県明石市	「中国古代絵画・史跡からみる女性画家の記録」	王 衛明	本学文学部文化財学科教授
●第11プロジェクト 現代の表象文化にみるトランスジェンダー（2009～2012年度）			
日時	タイトル	発表者・報告者	所属
2009年度			
1月20日	「浄瑠璃の女装・男装」	林 久美子	本学文学部日本語日文学科教授
2010年度			
5月19日	「中国、男女のイメージとそのゆらぎ」	蒲 豊彦	本学文学部日本語日文学科教授
2月16日	「T・E・ロレンスの性意識—ホモセクシュアル？ホモソーシャル？アセクシュアル？」	浅井 雅志	本学人間発達学部英語コミュニケーション学科教授
2011年度			
5月25日	「日本語から見たトランスジェンダー」	安達 太郎	本学文学部日本語日文学科教授
2月24日	「織田作之助と千日前大阪劇場裏の少女怪死事件—「世相」「神経」の—背景—」	細川 涼一	本学文学部歴史学科教授
2012年度			
6月27日	「松浦理英子とトランス・ジェンダー」	辻本 千鶴	本学文学部日本語日文学科助教

●第12プロジェクト 装いと身体の歴史(2013～2017年度)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
2013年度			
12月4日	「日本近世の肥料事情」	水本 邦彦	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部教授
2月26日	「近代中国のトイレと尿処理」	蒲 豊彦	本学文学部日本語日本文学科教授
2014年度			
7月9日	「身体の歴史研究についての前提的報告—身体へのまなざしをめぐる—」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
3月6～7日 於：大津市	「敦煌莫高窟壁画における供養者画像研究の視点と課題—特に女性供養者画像を中心として—」	王 衛明	本学文学部歴史遺産学科教授
	「興福寺東金堂文殊菩薩像の服制」	小林 裕子	本学文学部歴史遺産学科准教授
	「世紀転換期ドイツにおける〈生改革運動〉—身体表現と身体ケアの接点を探る—」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
2015年度			
10月14日	「消費社会の発展と近代的身体の発見」	北山 晴一	立教大学名誉教授
2月17～18日 於：大津市	「泉佐野市の社建建築調査—佐野・北中地区を中心に—」	登谷 伸宏	本学文学部歴史遺産学科助教
	「中世の湯屋について」	米澤 洋子	本学非常勤講師
	「第二帝政期ドイツにおける軍隊と食」	南 直人	本学文学部歴史学科教授
2016年度			
1月16日	「太った身体のアンビバレンス：食べる者へのまなざし」	橋本 周子	滋賀県立大学人間文化学部国際コミュニケーション学科助教
2月16日	「『信太妻』という語り物—狐と文殊が託したもの—」	林 久美子	本学文学部日本語日本文学科教授

●第13プロジェクト 社会における女性の活動—京都とその周辺を舞台にして(2018年度～)

日時	タイトル	発表者・報告者	所属
2018年度			
3月11～12日 於：三重県伊勢市	「史料に見る山科大宅郷—京都橋大学の周辺の歴史」	米澤 洋子	本学非常勤講師
	「齋宮跡の保存と調査・整備・活用の歴史」	増測 徹	本学文学部歴史学科教授
2019年度			
3月7日	「織豊政権期の天下人と公家文化」 →新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催中止。	尾下 成敏	本学文学部歴史学科准教授
2020年度			
3月10日	「山科・大宅の地域研究と山科郷古図—大宅廃寺の問題に関連して—」	増測 徹	本学文学部歴史学科教授
2021年度			
2月28日	「一遍上人と尼僧集団—『一遍聖絵』に描き分けられた尼の顔—」	米澤 洋子	本学非常勤講師

表4 女性歴史文化研究所 出版物一覧

出版物名	出版社、発行年	プロジェクト名
『家と女性の社会史』	日本エディタースクール、1998年	第1プロジェクト「歴史における家族と女性—日本と世界」
『母と娘の歴史文化—再生産される〈性〉』	白地社、2009年	第2プロジェクト「女性文化の再生産過程—母-娘関係の研究」
『女の歴史』I～V<翻訳>	藤原書店、1994年～2001年	第3プロジェクト「西欧女性史研究—フランスを中心に」
『伝えたい想い—枚方の女性史』	枚方市発行、ドメス出版、1997年	第5プロジェクト「地域女性史研究 大阪府枚方市の場合」
『京都の女性史』	思文閣出版、2002年	第6プロジェクト「京都の歴史と女性」
『京都と鴨川の歴史』	思文閣出版、2001年	
『〈悪女〉の文化誌』	晃洋書房、2005年	第7プロジェクト「文学に見る『悪女』観の形成」
『女の怪異学』	晃洋書房、2007年	「文学に見る『悪女』観の形成」
『わたちのシルクロード(異文化交流と女性)』	平凡社、2010年	第8プロジェクト「女性生活文化交流史」
『異文化交流史の再検討：日本近代の〈経験〉とその周辺』	平凡社、2011年	
『医療の社会史—生・老・病・死』	思文閣出版、2013年	第10プロジェクト「歴史における女性の身体と看護・医療—生・老・病・死—」
『表象のトランス・ジェンダー—越境する性』	新典社、2013年	第11プロジェクト「現代の表象文化に見るトランスジェンダー」
『身体はだれのものか—比較史でみる装いとケア』	昭和堂、2018年	第12プロジェクト「装いと身体の歴史」



写真4 女性歴史文化研究所出版物(一部)